がけっぷち生徒会

kaji

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
がけっぷち生徒会

【Ｎコード】
Ｎ８０６９Ｇ

【作者名】
ｋａｊｉ

【あらすじ】
支持率２０％以下が３ヶ月続いたら生徒会長を退任しなければならない。２ヶ月支持率２０％以下になった会長は会長職を維持するために色々やるのだが……。

「会長今月の支持率は１７．６％です。これで２ヶ月連続支持率２０％を割りました」

副会長の来栖恵梨香（らいすえりか）は眼鏡の縁を持ち上げながら冷たく言い放った。この女はいつも冷たく言う。もっと優しく言ってもいいのにな。この米が！

「ああ。分かってる。今対策を考えている所だ」

「来月も支持率２０％割ることになりますと会長の座から降りなくてはなりませんよ」

「そんなことは分かっている。少し黙っていろ！　このコ……。いや来栖君」

「今何かおっしゃいましたか？」

「何も言っては言ないぞ。それよりも投票のコメントを纏めて俺に報告してくれ」

「了解いたしました」

そう言うと来栖副会長はパソコンの前に座って作業を始めた。来栖恵梨香は身長が１７０ｃｍもあるでかい女で長い綺麗なストレートの黒髪の女だ。来栖君はその苗字から影ではお米さんとか米！とかライスなどと呼ばれている。ただ本人がひどくそのニックネームを嫌っているらしく。俺も前にうっかり言ってしまって、１ヶ月程口を聞いてもらえなかった。しかも生徒会の時に出されるお茶に炊く前のお米を混ぜるなどの嫌がらせなどをしてきて俺は2度と来栖君の前で「米」という単語は言うまいと心に誓っていた。

「投票のコメント纏めました」

「お。早いな。じゃあ何件か読んでくれ」

我々の通っている私立崖淵が丘学園はある特殊なシステムがある。それは生徒会長の支持率を集計して３ヶ月連続で支持率が２０％以下を下回ったら会長を降りなければならないということだ。俺こと雷田雷太（らいでんらいた）通称ライトニングは３ヶ月前に８６、５％という高い支持率で会長に就任したがある事件がきっかけで支持率が一気に下がり今では２０％を割るようになった。投票は生徒会のＨＰから自由にできて２０日までの集計を２５日に発表することになっている。

「では読みます。あなたが良いのは顔だけですね。正直がっかりしました。匿名Ｘ係長より」

「ほう……。ちなみにそれは来栖君個人の意見ではないだろうな？」

「いえ。私は会長の顔がいいなどと１ミクロンも思っておりませんので」

そこを否定するのかよとは思ったが話が続かない上にこの女に何を言ってもしょうがないので先を読んでもらうことにした。

「体育祭での会長の挨拶での体育祭にまつわる小話はとてもつまらなかったです。これからはああいったお話は止めていただけるとありがたいです。　３年Ａ組一同より」

「……」

「会長の公約の１つのマーボーラーメンを学食に導入実現おめでとうございます。ただこれを喜んでいるのは会長だけですよ。うぬぼれるな。　ラーメン大好きもじゃもじゃより」

「……」

「おい！　もっとやる気が満ち溢れるようなコメントは無いのか！　お前わざとこういうコメントを選んで読んでるだろ！」

「いえ。適当に選んだだけですが、あまりにも批判のコメントが多

くていいコメントを探すのが難しいので」
「そんなことはないはずだ。少なくても1割以上は私の意見に賛成してくれる者がいるのだから無いはずはない」
「そうですね。……。ああ。ありました」
「そうだろう。そうだろう。さあ。読みたまえ」
「かいちょうさんはとてもすばらしいおかたです。いっしょうついていきます。　えさえさより。これは書記の江佐エサ子さんですね」
「もういい。後でコメントの一覧をプリントアウトして提出してくれ……。」

俺は椅子に座って生徒会室から見える景色を見ながら考え込んでいた。

「何を思い悩んでいるんだい？」

今一番聞きたくない声が聞こえた。振り返ると茶髪の一見すると美少年のような男が立っていた。千上真布留通称マーブルだ。この生徒会の副会長で自分のことをかっこいいと思い込んでいるナルシスト野郎だ。

「君には関係ないことだ。黙っていてくれ」

マーブルは長い前髪を掻き分けると自分の顎に手をあてて聞いてきた。

「そんなことだからあなたの支持率は下がる一方なんですよ。大衆は飽きやすいものです。今のあなたには生徒は何も期待してはいませんよ。早々に会長を引いたほうが身のためです」

「いいからどこかへ行け。今はお前の相手などしていられない」

俺は再び外の景色へと目をやった。野球部がサッカーの練習をしているようだった。分からないものだな。この世の中は。

「まあいいでしょう。どうせあなたは今月までです。後は私、千上真布留にお任せください」

そう言うとマーブルは生徒会室から出て行った。部屋には来栖君のキーボードの音と外の野球部のサッカーの練習の掛け声で満たされていた。

「かいちょーさん。かいちょーさん」

その後入れ替わるようにショートカットの小さな女の子が元気に入ってきた。生徒会の書記の江左エサ子（えさえさこ）だ。１４０ｃｍいってないんじゃないかという身長にも関わらず元気に動き回る女の子だ。

「なんだ。騒がしいな。えさえさ」

「かいちょーさん。ききましたよ。なんでもまたしじりつがさがったそうですね。これがけっぷちというやつなんですねー」

えさえさはなんだかやたらと興奮しているようだった。ちなみにえさえさというのは彼女のニックネームだ。詳しい説明は止めておこう。

「ああ。そうだ。崖っぷちだ。だからなえさえさ。お前も何か良い方法が無いのか考えてくれないか？」

「ふえ。そうですねー。うーん」

えさえさはうんうん唸りながらフリーズしたようだった。彼女には

どうやら難しい問題だったようだ。俺はえさえさは放っておいて自分で考えることにした。

「やはりこれしかないようだな。来栖君、えさえさ、仕事を止めて聞いてくれ」

俺はかねてより考えていた作戦を実行に移すことにした。

「偉大な先人もこう言った「全ての道は阿弥陀くじで決まると」これからの生徒会の方針は阿弥陀くじで決めることにした」

「……はあ」

「かいちょーさん。さすがですね。わたしはそこまではかんがえつきませんでしたよ」

俺は早速阿弥陀くじを作った。途中でえさえさも手伝ってくれたので意外と早くできた。来栖君はというと興味を失ってパソコンで作業を始めだした。

「できた。完璧な出来栄えだ。特にこの縦の棒と横の棒のクロスした感じがなかなかいいぞ」

「はい！　たのしみですね。えらんでみてくださいよ。かいちょーさん」

「ああ。そうせかすな。では行くぞ。全ての始まりはこの瞬間に始まる。生きろこの刹那を！」

俺は場所を決めて阿弥陀をたどっていった。

「こ。これは……」

「どうですか？　かいちょーさん」

『ティッシュ配りで支持率アップ！　ウッハウハだぜ。憎いぜこんちくしょう』

と書いてあった。なんだこれは誰が書いたんだ。俺が書いたんだ。ついに支持率をアップするための作戦が決定した。

「それでは生徒会でティッシュ配りをすることになった。手配をよろしく頼む」

「よろしいですけど予算はどうなさるおつもりですか？」

来栖君が少し苛立ち気味な声で聞いてきた。

「予算のことはえさえさ。いつのもように頼んだぞ！」

「はい！　おまかせください」

えさえさにはいつものように裏で処理をしてもらうことにした。彼女は見た目に似合わずそういった処理がとてもうまいのだ。きっといい社会人になれるに違いない。

そして色々ふっ飛ばしてティッシュ配り当日！

「どういうことだ。俺は会長就任壮行会の打ち合わせがあるからと言われたから来たんだぞ。なんだこれは」

早朝校門の前でティッシュを配る準備をしていると当日まで真実を知らされていなかったマーブルが騒ぎ出した。本当にうるさいわ。こいつは。

「俺がこんな下々の仕事ができるか。俺は降りさせてもらうからな」

そう言うとティッシュを放り投げて学校に向けて歩きだした。俺はあらかじめ用意していた切り札を使うことにした。

「少し待った。千上真布留いやマーブルよ。お前この学校に居たいよなあ？　そうだろう？」

「どういうことだ？」

マーブルは足を止めてこちらを振り向いた。よしよし食いついたな。

「俺に下にはなあ。会長直属の新聞部がついているんだよ。それがどういうことだか分かるか？」

「だから何だ？」

「お前色々とやんちゃしているらしいじゃないか？　俺には学園いやこの町のありとあらゆる情報が集まって来るんだよ」

マーブルの顔は汗だらけになっていた。やがて観念したのか先ほど放り投げたティッシュを拾い出して無言で校門に立ってティッシュを配る準備をしていた。

「みんな笑顔だぞ！　そして声を張れ！　お・は・よ・う・ご・ざ・い・ま・す。あなたの快適ライフをサポートします生徒会です！　さあ復唱！」

俺たちは生徒が来るまで復唱を続けた。そして、生徒一人一人に真心を込めてティッシュを差し上げた。途中で先生が乗り込んできたが俺は紳士的な態度で応対した。なんとか全てのティッシュを配り終えて俺たちは達成感でいっぱいだった。

放課後

「来栖君、恐らく今日の感想のメールが届いているんじゃないのかな？」

俺たち生徒会員は放課後に４人全員集まって今日の反省会をすることにした。なんだか気持ち、みんながやつれた感があるのは気のせいだろうか？

「何件か来ているようですので読み上げますがよろしいですね」
「ああ。大音声（だいおんじょう）で読んでくれ。今回はものすごい手ごたえがあるから楽しみだ」

俺はわくわくして来栖君がパソコンから今日の感想をプリントアウトするのを待っていた。えさえさはなぜかじっと手のひらを見て考えこんでいた。マーブルはというと自分の髪の毛を触りながら遠い目をしていた。

「では読み上げますね。今回の朝の件ですが正直引きました。今後こういうことはやめて欲しいです。　ご飯よりパン派さんより」
「……」
「正直意味が分からなかったです。会長辞めさせよう同盟さんより」
「たまにはまともなことをやってください。　ティッシュよりも愛が欲しいさんより」
「雷電会長。先月貸したＣＤ早く返してください。　２年Ｃ組３４番より。あ。これは違いましたね。失礼いたしました。では次の……」
「もういい……」
「まだありますがよろしいんですか？」
「ああ。もういい……」

俺はとても立っていられず近くの席に抜け殻のように座った。何がだめだったんだろうか。さっぱりわからない。やっぱり決め方が悪かったんだろうか。ダーツにしておけば良かったのかもしれない。

「雷電会長。これで来月の投票が楽しみになりましたね。私はこれから来月の会長選挙の準備をしなければいけませんのでこれで失礼します。では。くわっははははあはー！」

マーブルは勝ち誇った笑いをしながら生徒会室を後にした。生徒会にはマーブルの香水の匂いが残った。臭いんだよ。

「かいちょうさん。わたしきょうははやくかえってふうとうののりづけのないしょくをしないといけないんです。なのでかえりますけどげんきだしてください。きっとつぎはだいじょうぶですから」

「ああ。ありがとうえさえさ。内職頑張れよ……」

「はい！　さよならですー」

えさえさは元気よく生徒会室から出ていった。なんて不憫な子なんだろう。俺の目からはいつの間にか涙が溢れ出ていた。

「会長。私も上がりますけどよろしいですか？」

「ああ。気をつけて帰れよ。お疲れ様」

「会長。私も何かいい方法がないか考えてみますので。それではお疲れ様です」

そう言うと来栖君は生徒会室から静かに出て行った。なんていい子なんだろうか。ごめんな。米とか言っちゃってさ。俺はしばらく生徒会室で袖を濡らしていた。

次の日、学校の掲示板に新聞部の新聞が貼られていた。基本的に新

聞部の新聞は月一の発行なのだがニュースがあるときには臨時で発行される場合もある。一面は昨日の我々のティッシュ配り記事だった。「会長策に溺れる！　会長職に赤信号か！？」という見出しで昨日の一件について面白おかしく書かれていた。俺はこの新聞を見て必ず会長の座に踏みとどまってやるという決意を新たに固めて次の作戦を練ることにした。

次回投票日まで後　２８日！

（後書き）

ご拝読ありがとうございます。学園物を書いてみたくなりましたので書いてみました。暇を見て考えていったらこんな話を思いつきました。

初めてキャラ設定などを決めて書きましたので今までよりは少しはましになった気がします。

読んでいただける方がありましたらありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8069g/

がけっぷち生徒会

2011年1月21日02時58分発行